

まえがき

青 井 和 夫

待ちに待った流通経済大学の新しい紀要「社会学部論叢」が、やっと日の目を見ることとなった。

864 頁という大部な『社会学部開校記念論文集』が出版されたのが1989年4月であるから、あれからもう1年半ばかりたったことになる。1988年4月の流通経済大学社会学部発足に際して、まずわれわれが手がけたのは、新しく社会学部の専任教員になられる方々を中心として「社会学部開校記念論文集」を出版することであった。それに丸1年をかけた後、高村委員長を中心とするこの「記念論文集編集委員会」はそのままの形で社会学部の「学術研究委員会」に発展的解消をとげ、ただちに次の紀要（研究発表誌）刊行準備に着手した。

だが、経済学部からは「流通経済大学論集」（以下「論集」と略称する）という紀要がすでに年4回刊行されていたので、これとの折り合いをうまくつけるために、経済学部との間で半年以上にわたり話し合いが持たれた。こうして、経済学部紀要たる「論集」とは別に、社会学部紀要として「流通経済大学社会学部論叢」（以下「論叢」と略称する）を年2回刊行することが決められたのである。もちろん、従来通り社会学の教員やインストラクターは「論集」に投稿することができるし、逆に経済学部の教員やインストラクターも「論叢」に投稿しうるとは言うまでもない。

ここまで来ると、ただちに「社会学部論叢」のレイアウトを考え、投稿規定ないしは執筆要綱をつくり、原稿募集に取りかからねばならないので、急に慌しくなった。だがそれにもかかわらず、きわめて多忙な中でこれら一連の面倒な刊行準備を着々と進めて下さったのが、高村委員長を中心とする前「学術研究委員会」の方々であり、それを引き継いだのが山口委員長を中心とする現「学術研究委員会」の方々だったのである。言うなれば、前委員会が論叢刊行の方法についての大綱をつくり、現委員会がその細部を具体化して実行に移して下さったのだ。ここに改めて、これらの方々にあつく御礼を申し上げたい。

一般にわが国の大学では、研究・教育の質の向上をはかるために、学部や大学ごとに

紀要を発行するのが普通である。中には、紀要を会員制（有料）で学生諸君に頒布する例も少なくない。そこで、本学でも、この新しい「論叢」の刊行を契機として、社会学部の全学生を「社会学部論叢刊行会」——この会の委員は前述の学術研究委員会の委員で構成されている——の維持会員とし、年間1000円の維持会費を徴収して、学生諸君にも「論叢」を頒布することにした。

これは、論叢刊行費の大学負担分を、少しでも節約しようとするためではない。もっぱら教員のためだけにあった他大学の紀要とは異なり、何とかして、われわれの「社会学部論叢」を学生諸君もふくめた全学部の刊行物にしたいという、気持ちを持っていたからである。「只ほど高いものはない」と言われるように、無料で配布した論文はとかく読まれないものである。だとすれば、コーヒー2～3杯分にしろ費用を負担してもらうことにより、かえって関心を高めてもらえるのではないか？

もちろん、学生諸君が「社会学部論叢」を手取るには、内容面で彼等の興味を引き、難しさからいっても理解できうるものでなければならない。だが、学生諸君に迎合しすぎて学問的水準を下げるなら、「論叢」の評価は大きく低下し、学術論文集としての生命を失う結果となるだろう。ここには大きなディレンマがある。

ところで、わが社会学部では「社会調査実習」を必修科目にしているが、その理由は、社会調査が社会学にとり不可欠なものであり、しかも調査の骨^{こつ}は、いくら社会調査法の講義を聞いても、実際に体験してみなければ身につくものではないというだけではなかった。それもさることながら、それにも増して、教師と学生が大学の内外で同じ釜の飯を食いながら、共に本を読み、人々の生活の実態を調べ、意見を聞き、さまざまな資料を集めることにより、はじめて心の通じあうアカデミック・コミュニティが出来上ると考えたからにはほかならない。

このように考えてくると、「論叢」もまた、アカデミック・コミュニティづくりの有力な手段たりうるのではないか？ たとえば、将来機が熟した暁には、「論叢」に講義用テキストにも使えるような論文を掲載してもいいだろうし、「論叢別冊」の形でなら、学生諸君の参加した社会調査実習の結果の要約や、毎年の卒業論文の題目（かんたんな要約のついたものなら、これに越したことはない）を掲載したり、優れた卒業論文に賞を出し、それを掲載するなど、さまざまな企画が考えられる。毎年全員の教師が数篇ずつ選んだ「学生向けの推薦図書目録」ないしは「書評目録」などをそれに乗せるのも一法であろう。

1000円の維持会員費に対しては、この程度のサービスがあってもいいと思うが、どうであろうか？ プラスとマイナスの両面を踏えて皆の衆知をあつめるなら、「論叢」に血の通った温かさを与えることが出来るのではないか？

しかしながら、このように言ったからとて、教員中心の従来の「紀要」に意味がないと言っているのではない。よく、「各大学の紀要なるものは、レフェリー制がないだけ

に、自己満足的な論文の寄せ集めで、学問的にも価値の低いものだ」と貶す人があるが、けっしてそうではない。自由に書けるだけに、思い切って自己の主張を出せるという長所もあるのだ。したがって、この「社会学部論叢」を生かすも殺すも、一にかかって執筆者全員が全力投球するか否かによるといえよう。

ご覧の通り、流通経済大学「社会学部論叢」の創刊号には、内容的にもバライアティに富んだ力作が揃った。第2号・第3号もすでに主要論文の執筆申し込みは終わっている。論文投稿希望者が多いので、当分の間は「研究ノート」「書評」「資料」「翻訳」などへの紙面は圧迫されやすいが、大方のご叱正を仰ぎつつ、衆知を集め、この「社会学部論叢」をどこにもないユニークな研究発表誌として大成させたい。

これで社会学部の飛躍しうる学問的基礎が据えられた。さあ、歩調を揃えて前進しよう！